

ようこそ異界茶屋ふぶき屋へ外伝雑談

不死者のナザリック

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この小説は本編である「ようこそ異界茶屋ふぶき屋へ」の執筆中の間の時間にサクツと書いたお話やボツになったお話を書いて行こうと思います。

今作品はキャラの会話がメインで説明は基本行いません。

なのでキャラの設定については本編をお読みくださいませ。

本作はホロライブの二次創作になります。

キャラ崩壊は多々すると思うのでご了承ください。

目次

第1話 「雑談」	1
第2話 「ガチャ」	4
第3話 「チョコレート」	11
第話 「……鏡……影……」	18
第4話 星の降る日に	24
第5話 「お昼寝」	31
第6話 「家でお花見」	35
第7話 「山川散策」	40
第8話 「猫又と雪のぐい令嬢」	47
第9話 「白獅と紫龍」	54

第1話「雑談」

「第1話雑談」

「ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……」

「ねーナザー！今日の雰囲気なんか変じやないかにや？」

「そうだねー姫ちゃん、なんかいつもと違うねー」

「そりやそうだよ、だって今回番外編だもん。」

「店主！番外編ってどういうことですか？」

「それがね、主さんが本編の執筆中に思いついたちよつとした話を書くんだって。」

「そうなんですか。」

「チツ 本編書いてる時にこんなしょうもない番外編書くなんてなに考えてるんだか」

「オーナー、それはさすがに言い過ぎです。」

「そうだよ！黒ちゃんそんな言いかた無いよ。」

「ああ！別に何言ったって良いだろ番外編なんだから！」

「まあ、黒さんのことは置いたといてにやあ。」

「おい、猫姫！」

「今回のこの話は何をするのかにや…にや！にや！にや！にやー痛いにやあ！痛いにやあー黒さん!!」

「人の話を無視するんなって、何回いえばわかるんだよ！この猫が!!」

「黒ちゃん落ち着いて！」

「それで、ホントに何をするのですか？」

「今回は上のサブタイトルの通り雑談をしてだって。」

「雑談ですか？」

「うん、そうみたい。」

「はあー、雑談するために呼ばれたのかよ！私達」

「確かに上のサブタイトルには雑談って書いてあるにや」

「雑談って言ってもですけど、何を話しましょうか？店主」

「うーん、どうしよつか…？」

「雑談なら何言っても良いんだろ？なら主の悪口を言いたいだけ、うにゃあー！」

「もう、それはいいにゃあ、ほんとに何話そうかにやフブキさん？」

「そうだねー……」

「そうだ！自己紹介しよう。」

「自己紹介？」

「なんで今さら自己紹介なんだよ。」

「だって私と黒ちゃんは知ってる人は多いだろうけど、ナザさんと猫姫ちゃんは知らない人が多いじゃない。」

「そりゃ、この作品のオリジナルキャラなんだからな。」

「だから私達も含めて改めて自己紹介しようって思ってる。」

「それ、良いですね店主♪」

「確かに面白そうにゃあ。」

「じゃあ私から行くね。」

「私は白上フブキって言います。ふぶき屋では店主をやっています。好きなことはゲームで好きな食べ物はお茶と、とうもろこしです。皆さん改めてよろしく願いますねー。」

「じゃあ、次黒ちゃんね。」

「はあ？私もするのかよ！」

「みんなするの！」

「たく、わかったよ」

「名前は黒上フブキ、ふぶき屋ではオーナーをやってる。いちようぶぶきの双子の妹だ。好きなことはゲームで好きな食べ物はコーラと肉だ。」

「これでいいだろ？」

「オツケーだよ黒ちゃん♪」

「次！私が行くにゃあ。」

「猫姫って言うにゃあ、ふぶき屋では接客を担当してるにゃあ。好きなことはみんなとお話することと暖かいところでお昼寝する事にゃあ。好きな食べ物はお魚にゃあ。改めてよろしくにゃあ♪♪」

「最後、ナザにゃあ。」

「はい、わかりました。」

「名前はナザと言いますです。ふぶき屋では料理を担当してるです。好きなことは読書と料理です。好きな食べ物はお揚げと鳥肉です。皆様改めてよろしくお願いいたしますです。」

「これで一通り自己紹介できたね。」

「今回はこれで終わりか？」

「そうだねー」

「あれ、もう終わりなのかにや？」

「番外編だからね。」

「では、最後はみんなでお挨拶しましょうです♪」

「それ、いいねー」

「みんなでやろうにやあ♪♪」

「たく、仕方ない……」

「では皆さんここまで読んでいただき……」

「」「ありがとうございます」「です」「にやあ。」

第2話 「ガチャ」

第2話 「ガチャ」

「ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……………」

「さーてと、今週から私の好きなキャラのピックアップだから、引いていこーと♪」

「？」

「この日のために石もたくさん貯めておいたから」

「??」

「よーし、引いていこーもしかしたら最初の10連で、出て来てくれるかも♪」

「??」

「えい！」ポチ

「??」

「確定演出こない…………」

「まあ、まだ10連だし、まだまだこれからだから」

「??」

数分後

「うー…まだ30連だから、まだジヤブだから…」

「??」

さらに数分後

「もう半分…ピックアップどころか、☆4のキャラすら出てない…うん大丈夫。大丈夫、まだ半分あるから」

「…？」

「あ、演出来た！くるか、くるか」

「?!」

「あー！違う…もう持ってるー」

「…………??」

さらに数十分後

「石なくなっちゃった…仕方ない補充しよう」ポチ チャリン
「……………??」

「よし、補充できたし続けよう。」
「……………」

数十分後

「百連目」

「……………」

「二百連目……」

「……………」

「無くなったから二枚目だ！」

「三枚目……………」

「……………」

「五枚目……………まだ、まだ回せる。」
「……………」

「なんで！こんなに引いて、でないんだよー」ジタバタ

* * * * *

* * * * *

* * *

* *

「……………あのー店主？」
「にや!? ナザさん! い、いつからそこに?」
「えーと、店主が「ピックアップ? だから引いていこー」からですが。」
「最初からじゃないですかー なんで声かけてくれなかったんですかー」
「すみませんです…えらく集中してたものなので」
「ところで、何をやってたのですか?」
「えーとね…これやってたんだー」スウ
「携帯のゲームですか?」
「うん、そのガチャをやってたんだ。」
「ガチャ? 商店街にある回すやつのことですか?」
「う、うんそれはガチャガチャだけどそれみたいなものだよ。」
「そうなのですか、そのガチャ? で何があったのですか?」
「それが欲しいキャラがでないんだー」
「そうなんですか。」
「うん…だから仕方なくこのカードで……」
「フブキ!ここに居たのか!」ズズー
「あ!黒ちゃん」
「私もいるにやあ。」ヒョッコリ
「あ!姫ちゃん」
「何やってるにや?」
「店主がガチャ? つてものをやってたから見てたんだ。」
「またやってんのかよ。」
「黒ちゃん、良いじゃん!別に好きなんだから!」
「どうせまた、課金しまくって爆死したんだろ!」
「そ、そ、そんなに課金してないし、それにまだ爆死って決まったわけじゃ……」
「じゃあ、床に転がってるカードはなんだよ?」
ギグ「え、えーと、に、二千円札のカードだ、だよ、く、黒ちゃん……」アセアセ

「嘘つくな、どう見たって二万円って書いてあるだろ。」

「に、二万円？」

「さて、二万円のカードが五枚目もあるってことは……」

「十万も使ったのかにやあ!？」

「べ、別に良いじゃん!使ったって!!」

「いくらなんでも使いすぎなんだよ!!!」

「そうだにや!十万稼ぐのにどれだけかかるとおってるにやあ!!」

「一週間はかかりますね」

「むー今日はこれで終わるつもりだったもん。」

「今日はって明日もするのかにやあ?」

「もちろんだよ、姫猫ちゃん!一週間あるんだから出るまで引き続ける……」

「禁止」

「……………え。」

「フブキ!お前はしばらく課金禁止!!」

「黒ちゃん!？」

「当たり前だ、このままじゃ金がなくなる。」

「黒さんの言うとおりにやあ!このままだと家計が火の車にやあ。」

「その前に出れば良いんだよ」

「不確定過ぎるんだよ! 猫姫!フブキの財布を取り上げろ!」

「わかったにやあ。」

「あー猫姫ちゃんやめて!」

「フブキさん、許してにやあ これはこれはフブキさんのためでもあるのにやあ。」

「あ、私の財布!」

「財布は私が預かる。」

「ひどいよ黒ちゃん……」

「そういうことだ、返して欲しかったらしばらく課金は控えろ!」

「うーどうしよう……」 シュン

廊下にて……

「ねえ姫ちゃん」スタスタ

「なにや、ナザ？」スタスタ

「財布取り上げるなんてかわいそうだよ。」

「あれもフブキさんのためにやあ、あの調子じゃあ私たちが生活できなくなっちゃうにやあ。」

「それはそうだけど…楽しみを、奪うのはよくないよー」

「大丈夫にやあ、ナザあういうゲームはガチャだけが楽しいだけのゲームじゃないにや。」

「そうなんだ……」

ナザと猫姫の自室にて

（でも店主、カ、キ、ンを禁止って言われてからすごい落ち込んでいるです。）

（なんとか元気付けられないかなです？）

（ん、そういうえば店主に見せてもらった画面のキャラって私に、似てたような……↓

「そうだ！」

「どうしたのかにや、ナザそんな大声だして」

「ねえ姫ちゃん、ねっとつうはんのやり方教えてくれない？」

「ナザ：それを言うならネット通販にやあ、まあそれはともかく、いきなりどうしてにやあ？」

「ちよつと買いたい物があつてね♪」

「そう言うとなら教えるにやあ。」

カタカタカタ「これかなー、違う、これじゃない。あーこれだー」ポチ

「これで、店主喜んでくれるかな？」

数日後……

ピンポーン「宅急便です」

「はい！ 今いくです。」

「こちらになります。」

「ありがとうございますです♪」

「おい、何買ったんだ？」

「秘密です。オーナー♪」

「ナザー教えてくれたって良いじゃないかにやー」

「姫ちゃんでもちよつとこれは秘密です。」

「むー良いじゃないかにやー」

「ダメ」

「変な物買ったんじや無いだろうなー？」

「心配なくです♪」

「ところで店主は？」

「ああ、フブキなら自室にこもってるよ」

「ありがとうございますです。では！」ピューー

「なんだったんだ一体？」

「ほんとにやあ。」

「うーなんとか血眼になって石集めたけどぜんぜん当たる気がしないよー」アワアワ

「店主ーいるですかー？」

「あーナザさん、いるよー」

「入って大丈夫ですか？」

「良いよーどうしたの珍しく……………」

「どうでしょうか店主」ニコ

「……………」放心中

「えっと…似合ってますか？」

「は！ ナ、ナ、ナ、ナザさん!? どうして私が欲しいキャラの格好してるの!？」

「はい♪店主に喜んでもらおうと、ねつと、で調べましたです。こうい

うのをコスプレ？っていうのですよね？」

「う、うん確かにコスプレって言うけどほんとになんて？」

「……この前、店主ガチャの課金、禁止されてしまったじゃないですか。」

「う、うん」

「そのあとのからの店主、とても落ち込んでいたので少しでも元気になつてほしくて……」

「ナザさん……ほんと気を使ってもらってありがとう。」ニコ

「店主に笑顔が戻ってくれて嬉しいです♪」

「ねーナザさん……」ウズウズ

「はい？なんで……」

「もう我慢できない！」バア

「きやあ！」ドカ

「ハアハア……」

「な、なにをするのですか、店主？ いきなり押し倒して……」

「ずっとでなかったけど、もう満足だつて目の前にいるんだもん」ハア
ハア

「お、落ち着いてくださいです店主。」

「落ち着いてられないよ、だって目の前にいるんだもん欲しかったキャラが♪」ハアハア ブンブン

「て、店主!？」

「ゲームで操作はできないけど、直接愛でることはできるもんねー」ハアハア ブンブン

「ひえ……」

「ナザさん……ちがう、今だけはこのキャラの名前で呼ばせて、そして……いっぱい愛でさせてー」ブンブン

「え、えー……」

第3話 「チョコレート」

ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……

ある日…ナザと猫姫の部屋

「ねえ、姫ちゃん」

「なんにやあナザ？」

「今日、雑誌で見たんだけどもうすぐ、ばれんたいんっていう人間様達のお祭りがあるんだよね？」

「お祭りって言うか…まあ、バレンタインは大切な人にチョコを送る日じゃあ」

「チョコレートですか？じゃあ、私たちもやっても良いの？」

「別に問題ないじゃあ♪ところで…誰に送るのじゃあ？」

「もちろん、店主とオーナーに決まってるじゃん♪」

「…まあ…予想どうりにゃあ」

「でも、どうしようチョコレートっていつでも、いっぱい種類があるのですし」

「そうにゃね、フブキさんは何でも良さそうだけど、甘ければにゃあ、でも問題は黒さんにゃあ」

「オーナーって確か、甘い物、店主ほど好きじゃなかったよね？」

「フブキさんほどの甘党じゃないけど、嫌いではなかったはずじゃあ」

「うーん…二人が喜んでくれるチョコレート…どんなのだろう…」
「考え中」

「確かに悩みどころにゃあ」
「考え中」

「…うーん…」

「うーんにゃあ…」

「そうだ！」
「ポン」

「なんか良いの思い付いたのかにゃあ？」

「うん♪ これなら、店主もオーナーも喜んでくれるよ♪」

「さっそく、材料買いに行こう」
「ガシ」

「あ！ちよつと待つにゃあ！一体何を作るのか教えてにゃあ！」
「ズルズル」

「行きながら話すから♪とりあえず市場へ全速前進！」バサツ！
「市場じゃあなくて商店街にやあー！しかもそんなセリフどこで覚えたのにやあー！」抱えられながら

「……あれ？市場ってどっちだったっけ？」

「おいにああ！」

ほぼ同じ頃……白上と黒上の部屋

「黒ちゃん！もうすぐバレンタインだね」

「ああそれがどうしたんだよ？」

「バレンタインだよ、黒ちゃん！大切な人にチョコを送る日だよ！」

「だからそれがどうしたって聞いてんだよ！好きな人でもできたのか？」

「そんなわけ無いじゃん！もちろんナザさんと猫姫ちゃんにだよ！」

「なんだよ……あいつらかよ」

「だから、一緒に作ろう黒ちゃん？」

「はあ！どうして私まで作らなきゃいけないんだよ！」

「こういうのは二人でやるのが良いんだよ」

「理由になつてねえよ！」

「……黒ちゃん、ナザさんや猫姫ちゃんのこと……好きじゃないの……」
ジー

「ぐ……」

「大切な人に日頃の感謝を伝えるのもバレンタインだと思うよ？できたら

「ぐ、ぬぬ……確かに、ナザのやつには料理だったり、家事のことで世話になってるし、猫姫も何だかんだで遊び相手になってくれたり……
確かに大切な奴らだが……」

「じゃあ決まりだね、黒ちゃん」

「……仕方ない、私も手伝う」

「でもどうしよーどんなのが喜んでくれるかな？」

「普通に市販のチョコで良いんじゃないか？ナザなんてコンビニの板チョコでも喜びそうだし」

「さすがにもっと良いのあげようよ、やっぱりここは手作りなのがいよ」

「私も言えないがフブキ、お前手作りチョコなんて作ったことあるのか？」

「もちろんないよ！」 即答

「即答すんなよ！」

「じゃあ、二人で練習しようよ」

「私もかよ！」

「ほら、そういうとことだからさっそく材料買いに行くよ！」グイグイ

「あ！ちよつとフブキ！引っ張るな!!」

バレンタイン前日

店の台所

「さあ姫ちゃん！頑張つて作つてこう！」

「まさか……カカオ豆から買つてくるとは思わなかったにやあ……」

「だつてこの方が細かい調節ができるからね♪」

「ほんとにナザの料理へのこだわりは感服するにやあ」

「じゃあ作つてこう、私がカカオ豆の殻とばく芽を抜くから、姫ちゃんはずり鉢でカカオ豆をすりつぶして」

「そういうのなら任せるにやあ」

.....

「よし、これぐらいでどうかにやあ？」

「うん、これくらいで大丈夫だよ　ここから砂糖とミルク入れていくから混ぜて」

「了解にやあ」クルクル

「どうかにやあ？」

「いいよ、ここからこのすり鉢を45度のお湯に入れて、バター入れるからさらにかき混ぜて」

「ふんつにゆ！固くなってきたにやあ」

「姫ちゃん頑張つて、なめらかなになるまでかき混ぜて、あとときどき確認のために舐めてみて」カチャカチャ

「ナザは何を作ってるのにやあ？」グリグリ

「チョコレートにかける抹茶ソースを作ってるんだよ」カチャカチャ
「抹茶ソースにやあ？」

「うん、店主特製のお茶葉と砂糖をしつかりすりつぶして、牛乳をちよつとずつ加えて作るんだ」

「想像しただけでも美味しそうにやあ」

「これなら店主やオーナー喜んでくれるよね？」

「絶対喜んでくれるにやあ」

同日、家の台所

「黒ちゃん！電子レンジじゃあ焦げちゃうよ！ちゃんとお湯で溶かさないといー！」

「うるさい！ちまちまお湯で溶かしてられるか！こつちの方が早い！」ジタバタ

「ちゃんと本通り作らないと美味しくできないよ！」

「あーも、わかったよお湯で溶かせば良いんだろ」

「じゃあ、黒ちゃんはチョコを溶かしてね、私はクッキーの生地を作ってるから」

「えつと……ボウルにバターと黄身を入れてかき混ぜていくと……」
クルクル

「なあフブキこれどれくらい溶かせば良いんだ？」

「ちよつと待つて今生地作ってるから」

「手が離せないなら私に貸せ」

「あ！待つて黒ちゃん！ボウルから手離したらダメ！」

「は？」プカ

「あー黒ちゃん！ボウルにお湯がー」

「くそー！急いでお湯出さねえと」

「こんな調子でちゃんと作れるかな……」

バレンタイン当日

「店主ーオーナーちよつと来てもらって良いですかー？」

「どうしたのナザさん？」

「なんか用か？」

「いいから来て下さいです♪」

（黒ちゃん、ちゃんとラッピング終わった？） 小声

（そつちこそちゃんと終わったのかよ） 小声

（もちろん……でもこんなので喜んでくれるかな……）

お店の席にて

「店主、オーナー今日は何の日かご存知ですか？」

「知ってるよ、今日はバレンタインでしょ」

「正解にやあ」

「そんなん知ってて当たり前だろ」

「はい、なので……」コト

「これを作ったのにやあ♪」コト

「んな!？」

「なにこれ……」

「バレンタインのチョコレートなのです♪♪」

「これ…作ったの？ナザさん、猫姫ちゃん!？」

「そうだにやあ」

「はい」

「すごいなこりや……」

「ナザがチョコから作りたいっていうから、カカオ豆から作ったにやあ」

「え！カカオ豆から作ったの！」

「はい、その方が二人とも喜んでいただけると思っています♪」

(うーこんなの見ちゃったら出しづらいよー) シュン
(出しづれー)

「どうしたのですか店主? 暗い顔をして」

「あ、あのね…ナザさん、猫姫ちゃん、二人に私達でバレンタインの
チョコクッキーを作ったんだけど受け取ってくれる?」

「……」

「……」

「え、えつとー」 ソワソワ

「マジかにやあ!？」

「本当ですか!？店主、オーナー!？」

「う、うん、こんなのできだけどあげるね」

「いえ、いただけるだけでも嬉しいのです」 キラキラ

「そんなに嬉しいもんか?」

「当たり前にああ、フブキさんや黒さんが作ってくれたものを喜ばな
いはずがないにやあ」

「そんなにいってもらうとそれだけで照れちゃうよ」

「店主、食べても良いですか?」

「うん、良いよでも、ボロボロだけど大丈夫?」

「むしやむしや」

「むしやむしや」

「どう?」

「うまいか?」

「おいしいです」 にやあ」

「そ、そうなの、こんなにボロボロのクッキーなの?」

「おいしいのはおいしいのにやあ、しかもフブキさんや黒さんが作っ
てくれたのなんて美味しくないはずがないのにやあ」

「え、でもこんなクッキーだよ……」

「店主、オーナー……」

「なんだ?」

「な、なにナザさん?」

「料理というのは別にただ味が美味しいだの見た目がきれいだのではないのです…重要なのは作ることへの思いなのです♪このクッキーには店主達が私達のことを思って作ってくれたのだということが伝わってくるのです」

「ナザさん……」

「……」

「だから…そんな暗い顔をしないでくださいです♪」

「そうだね、ごめんねこんなおめでたい日なのに二人とも暗い気持ちしっちゃって」

「そんなことないにやあ、フブキさんと黒さんが喜んでくれるだけで私達は嬉しいのにやあ」

「ささ、固くなる前に私達が作ったチョコレート食べてくださいです♪」

「そうだね、じゃあいただきます」

「モグモグ」

「モグモグ」

「どうですか？」

「美味しいよ二人供！」

「甘いあんまり好きじゃないがこの抹茶ソースが抑えてくれて食べやすいな」

「やったにやあ♪ナザ！」

「そうだね♪姫ちゃん♪」

「それに何より……」

「？」

「？」

「二人の気持ちがいっぱい伝わってくるよ！」

第話「……鏡……影……」

「……ここは……どこ？」

「まるで……鏡の迷路みたい……」

「ウフフフ……」

「誰です」

「ひどいわね……自分の顔も忘れたの」

「え……あなたは……私……」

「ウフフフ……ねえ……なんであなたは……あんな子達の下で働いてるの？……」

「何が言いたいのです……」

「……忘れたの……あなたが……何を……したのか……」

「……」

「自分があ……戦争で……何を受け……何を……したのか……」

「……」

「贖罪のつもり……それで……あなたがやってきたことの」

「……」

「そんな程度じゃあなたの罪はきえないわ……」

「……うんやう……」

ガシヤン!

「ハア…ハア……」

ーウフフフ…無駄よ……ー

「え……」

ー私は影…光があれば必ず影が生まれる……ー

「……あなたは誰……」

ーあなたが私であるように私はあなた……私は私の影……鏡の向
こうの存在……ー

「……」

ーウフフフ……またいつか……会いましょう♪……もう一人の私

……ー

「う……意識が……」

ーその時には……

答えを教えてね……

……ー

ウフフフ

「お……る……にあ……」

(う……うーん)

「起きるにやあ!ナザ!!」

「うわ!」

「やつと起きたにやあ」

「姫ちゃん?」

「珍しいにやね、私が起きるまで寝てるなんて、なんかうなされてたみたいだけど大丈夫にやあ?」

「うん……大丈夫だよ……うん……」

「本当かにや?体調悪いなら無理しなくてもいいにやあ」

「大丈夫だから……ほら、店主やオーナーが起きて来る前に準備しよう」
♪

「大丈夫ならいいけどにやあ、でもナザ」

「何?姫ちゃん?」

「何か悩んでるならちゃんと喋ってくれにやあ、私でいいなら何だつて聞いてあげるにやあ」

「……ありがとう……姫ちゃん、じゃあ何かあつたら遠慮なく、言うね」
♪

「そうしてほしいにやあ♪」

「ほら、急いで準備しよう♪」

「はーいにやあ」

(なんで……あんな夢見たんだろう……そっか……今日はあの日だか

らか……………)

ナザの記憶……

お母様……お父様……どこ……

ナザこつちよ急いで……

ハア、ハア

あなた……どうして……

今は逃げるんだ……とにかく。

いたぞ！逃がすな！

しまった……お前はナザを連れて逃げるんだ！早く！
でも……あなた！

ここは俺がなんとかするからさあ！

お父様——！

ナザ……お前は……強くいき……

ハア……ハア……

お母様……！

私には構わず逃げて！

でも……良いから！

あなたは、私達よりもずっと強い……だからか……
……………生きて……

復讐しよう!! やつらに! ……

そうだ! やつらには神ではなく、我ら自身で裁きを与えるのだ!

………

掟に背き、反対の者はいないな?

賛成!

当たり前だ!!

やつらに裁きを!!

殲滅は我らの掟だ!!!

………

やめて……

…助けて……

嫌……

………

お願い………します……娘達だけは………この子達だけは見逃してくだ
さい………

………

おい！なぜ貴様は敵を助けている！！

…うるさい……

ウフフフ……思い出した……あなたが何を受け……何をしてきたか……

第4話 星の降る日に

ここはこの世界とは違う異界のお茶屋さん……
とある日の夜……

「今日はお星さまが綺麗になのです」

彼女はお店の外用の長椅子に座りながら星を眺めていた。

今日は営業日であるものの、三人は、急な用事が入ってしまったため今日は一人で店番をしていた。

「それにしても今日はお客様が来なかったのです……私一人だったから良かったといえば良かったのですが……」

星を見上げながら呟いたが

それでも、誰もいないと言うのはやはり寂しい

と心の中では思ってしまった視線を地面に向ける

……あの人とあった日もこんな夜でしたっけ……

思考を過去に向ける

行くあてもなく、ただ放浪していた自分を温かく迎えてくれた日のことを……

……その人のために……その恩を返すために……その笑顔を守るために……

いけない、いけない……今はこんな感傷に浸ってる場合じゃない

首を横に振りつつ思考を今に戻す。頭の中の話題を変えようとふと壁掛け時計を見ると、もうすぐ閉店の時間になろうとしていた。

「もうこんな時間ですか」

そろそろ閉店時間だから片付けを始めようと、ベンチから立ち上がり店の中に入ろうとする。

すると……

「すみませんー!」

後ろから声をかけられた

声に反応して後ろを振り向くとそこにはベレー帽をかぶり、サング

ラスをかけた人物がたっていた

内心身構いた表情や動きでは見せないものの、普段見慣れないお客さんでしかもこんな暗がりであったためである。

「お茶屋さんってここにあってます？」

ベレー帽の人物はそう口を開いた。

女性の声であった。

警戒を解いた、今さつき後ろから声をかけた人物はこの人で間違いない

「はい、そうですよ」

笑顔で答えた、その笑みは今日初めてのお客様であったためか、いつもより笑っていた

「あー良かったーここであってー」

ベレー帽の人物は肩の力が抜けた用にガクツとするとすぐに顔をこちらに向けた。

暗がりでベレー帽とサングラスで顔の大半をおおっているものの、安堵の表情があるとわかった。

「こんな真つ暗だけでもまだ開いてます？」

「はい♪まだ大丈夫ですよー」

そういうとベレー帽のお客様を店内へ案内した。

「カウンター席とテーブル席のどちらがよろしいでしょうか？」

「んーとじゃあカウンター席で」

「かしこまりましたです♪ではこちらへどうぞです」

はカウンター席へ案内した。

ベレー帽のお客様はカウンター席に座ると身に付けていたベレー帽とサングラスを取ったベレー帽とサングラスのせいでわからなかったがその女性は青色の髪をしていた。

「お茶ですどうぞなのです」

お茶碗にお茶を注ぎ青髪のお客様へ出す。

「ありがとう、じゃあさっそく……」

そう言つては青髪のお客様はお茶を一口飲んだ

「なにこれ！美味しい!!こんなに美味しいお茶初めて飲んだよ!!」

青髪のお客様は目をキラキラと輝かせながらそう言った。

「そう言ってもらえると嬉しい限りなのです。おかわりが必要であればいつでも言ってくださいませなのです」

嬉しそうに答えた。

「え!?!おかわりして良いの!?!」

「はい♪いくらでもして構いませんです♪」

「えー!?こんな美味しいお茶なら何杯でも飲めるよ」

青髪のお客様はさらに目を輝かせて言った。

「こちらがお茶菓子のメニューになりますです♪よろしかったらどうぞーなのです」

お茶を注ぎつつメニューについても説明した。

「へーこんなにあるんだー……じゃあこれ!お団子二皿お願い」

青髪のお客様はメニューを指差しながら言った

「かしこまりましたです♪すぐにお持ちいたします」

台所へ戻り食器棚からお皿を二つ取り出すと近くの木箱からお団子を出してお皿に乗つける。

「どうぞーなのです♪♪」

お団子をお客様のカウンターに置き、台所に戻ろうとすると

「ちよつと待ってー!」

とお客様に止められた

「はい、なんででしょうか?」

「これ!店員さん用に頼んだやつだから一緒に食べましょう♪」

「え!?!」

初めてそう言われたために目を見張って驚いてしまった

「お客様のものなんていただけませんよ」

「そのお客様が食べて良いっていつてるんだからほらほら」

そんな攻防が続くこと数分……

ついに観念して座っていたいでしまった。

「ううううんーこのお団子も美味しい!お茶に凄合うよ」

横ではお団子を美味しそうに頬張りながらお茶を飲む青髪のお客

様がいた。

「この、お団子とかお茶も手作りなの？」

「はいそうですよーお茶の葉等の材料は市場から買ってくるのですが、ブレンドや料理は私達でやってるのです♪」

「へー凄いい！こんな美味しいのを手作りなんて」

「喜んでいただけると何よりなのです♪」

「そういえばこのお店って、店員さん一人でやってるの？」

「違いますよーいつもは三人でやってるんですが急な用事がありましてお店を閉めるわけにはいかなかったので私が残って店番をしていたのです」

「へーそうだったんだ…ごめんねそんな日に来ちゃって

」

「いえいえ、構わないのです♪」

笑顔で返した

「お客様は何をやってらっしゃるのですか？」

「私はねー歌を歌ったり、ゲームをやったり、いろいろなことをしてるよ」

「そうなのですか」

「店員さんはゲームとかしないの？」

「私ですか？私はあまりゲームはしないのです、最近好きな小説家様がいてその方の作品を追っかけてるのです」

目をキラキラさせながら語る彼女を青髪のお客様はクスクスと

笑った

「えーと…すみません変な趣味ですかね？」

「ううん、そんな事ないよ」

くそんな会話をしていること数十分

「あ！もうこんな時間じゃん！そろそろ帰らないと」

時計を確認するとすでに閉店時間を過ぎていた

「ごめんねー店員さんこんな時間まで話に付き合わせちゃって」

「いえいえ構わないのです♪こちらこそお団子をいただき、楽しいお話までさせてもらったのですから」

「うんうんお礼を言うのは私の方だよ！美味しいお茶にお団子に何より……」

「？」

「こんな楽しい店員さんとお話がでしたんだもん」

「……そう言っていたけるとほんとに嬉しいのです♪♪」

お会計を終え、青髪のお客様をお店の入り口まで送る

「今日はご来店ありがとうございますございました♪」

「こちらこそありがとうございます、ほんとにここは落ち着くお店だよお友だちの天使の子に聞いて来てみれば教えてもらった以上だったよ」

「そう思っていたただけるならほんとに光栄なのです……とここで」

「どうしたの？」

「帰り道は大丈夫ですか？」

すでに道は真っ暗であり、いなかであるため街頭もほとんどない状況である。

「大丈夫だよこれくらい、私こう見えても結構強いから」

「いえ、やはり今の時間はさすがに危ないのです。私が近くまで送っていくのですー！」

「え!?送ってくれるの?」

「はい♪お団子をいただいたお礼なのです♪♪」

「でもどうやってついてきてくれるの?」

「違いますよー 飛んでいきますです♪」

「飛ぶ?!?」

過ごし下がっててくださいと青髪のお客様に言う

全身に力を込める。

すると……背中が盛り上がり一対の翼が現れる、手を地面につけると「う……うー」とうめき声を洩らしつつ皮膚にはだんだんと鱗が現れていき顔の形もだんだんと変化していき体も大きくなっていく

「えー!?店員さんドラゴンだったのー!!」

「はい!!そうです!あまりこの姿にはならないのですが」

「ずっとトカゲだと思っていたよ」

「龍じゃない!!なのです!!」

誰かに似たことを言うのと青髪のお客様を背中に乗せて飛び立った。

上空

「うっひよーこりや凄いや」

「風など大丈夫ですか？」

「大丈夫だよーむしろ大興奮だよ!!ドラゴンに乗って空を飛ぶなんて最近みんなとやってる恐竜のゲームみたいだよ！」

「楽しんでもらえてるなら良かったのです♪」

「ほんとこんなみんなに自慢できるよ」

「あの……さすがにそれ目的でこられるのは困るのでこの事は秘密にしてもらえませんか？」

「えーどうしよっかなー」

「そこをなんとかなのです!!」

「じゃあ、また乗せてくれたら黙っててもいいよ♪」

「……………わかりましたです♪」

「あ、あそこー！私の家の近くだからあの辺に下ろして」

「かしこまりました」

青髪のお客様がさした空き地に降り立ちお客様を下ろすと人間の姿に戻った

「さつきも言ったけど今回はありがとう」

「いえ♪お客様を全力でもてなすのが私の主義なのです♪」

「さつきの約束もあるしまたお店におじやまさせてもらうね♪今度はちゃんと明るい時にでも」

「はい！いつでもお待ちしておりますのです♪♪」

「それじゃあ、またねー」

そう言っつて青髪のお客様は手を振りながら帰路について行くのを見て背中に翼を出すと自身も帰路についた。

お店への帰り空を飛びながら星を見ていた……

雲が一切ない空、満天の星空が空に輝いていた

遠い昔、母親から聞いた星の海の話思い出す

ふと視線を地上に戻すと地上にも満天の星空があった

「え!？」

下にも星!？」

私はほんとに星の海来てしまったのか、目をこすつてもう一度確認すると建物や街頭の光であった

地上の光は空とは違うものの色とりどりに輝いていた

「空のお星様が星の海でしたら地上の夜景はまるで星の街ですね」

そう眩きながら二つの星を眺めていると二つの星の間を流れるひとときわ輝く星があった

「あれは……流れ星ですかね……いやあの輝きようは……」

そしてあの青色は……彗星」

二つの間を流れる彗星を見ながらふと今日来てくださった青髪のお客様の顔を思い出す。

あのお客様もあの彗星のような髪の色でしたね……

「あの人も見てるのでしょいか……星の街で……星の海を流れるあの彗星を……」

ナザはしばらくの間その場にとどまり二つの星空とその間を流れる彗星をいつまでも眺めていた。

第5話 「お昼寝」

ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……

ある日の休日

「ふぁーお昼ごはんも食べたし何をしようかにやぁー」 テクテク
「あ！ナザー」

「あ、姫ちゃんどうしたの？」 パンパン

「何をやってるにやぁ？」

「今日は天気も良いからお布団を干してるんだよ」

「そうなのかにやー……！」 ピコーン

「？」

「ナザー！私も手伝うにやぁ」

「手伝ってくれるの？」

「そうにやぁ！手伝うにやー」

「ありがとう♪じゃあ干し終わったお布団を縁側に置いていってくれない？」

「そういう仕事なら任せるにやぁ♪」

****数十分後****

「♪♪」 パタパタ

「うんしょ、うんしょ、」

「姫ちゃん、大丈夫ー」

「ダイジョブにやぁこれくらい！お布団はここに置けば良いのにやぁ？」

「そうだよーあとこれだけだからちよつと待ってて」

「……………」

「あれ姫ちゃん？」

「スウスウ……」 縁側のお布団の上

「あー！姫ちゃんそこで寝ちゃあダメだよせつかく干したんだからー」 ユサユサ

「うにやぁ…こんなぽかぽかした日にお布団があれば誰だって寝たくなっちゃうにやぁ」

「うもー」

「ナザも干し終わつたのだから一緒に寝ようにやあ」

えい^いにやあ!

ドーン

「きやあ!」ドサ

「これでどうにやあ!」上からのし掛かつてギユウ

「姫ちゃんー離してよー」じたばた

「こうでもしないとナザ寝てくれないのにやあ」ギユウ

「わかつたから姫ちゃん!そんなに強くギユウしないでーもう抵抗しないからー!」

二人で寝つ転がつてうとうと、としている

「ねーナザーもしも何もする事がなくてこんなぼかぼかとした日だつたら何をするにやあー?」

「うーん……やっぱり読書かなーこんな日は縁側で本を読むのにぴったりだし」

「やっぱり読書かにやあーいつも思うけど、読書以外何かしないのかにやあ?」

「読書以外って言っても最近読めてない璃空埜様の新刊もあるからなかなか読書以外のことができななんだよねーそういうと姫ちゃんはこういう日は何をするの?」

「私はもちろんこうやってごろごろしたりお昼寝するにやあー」

「姫ちゃんらしいね」

「ナザもナザらしいにやあー」

「お前ら何やってんだ?」

「うにやあ!?!黒さんじゃないかにやあ!?!」

「オーナーどうしたのですか?」

「ああ……たまたま通りかかったらお前らがここでなんかやってたのが目に入っただけだ何やってんだ一体」

「皆様のお布団を干してたんですよー」

「布団干してんだったら何で布団の上に乗っかって横になってんだよ」

「こんなにはぼかぼかしてるとお昼寝したくなるのにやあー」

「確かに今日は暖かいが……って猫姫！お前私の布団の上に乗っかってんなー！」

「あーこれ黒さんのお布団だったのかにやあ？」

「かなりシワだらけですね」

「猫姫ー！ー！！」

「わー！黒さん落ち着けにやあ」

「オーナー落ち着いてくだ……？」

「ああ！ナザなんなん

「えーい♪」ドーン

「にやああ!？」バタ

「猫姫ちゃん！黒ちゃんをギユウしちやって」

「フブキさん、了解にやあ」ギユウ

「あ！ちよと猫姫！」

「私はこつちをつと」ギユウ

「うにやあ!？て、店主!？」

「うー！ん干したてのお布団を最高たねー」

「フブキ……お前……」

「良いじゃん黒ちゃん一緒にお昼寝しようよ♪」

「ふあー！黒さん暖かいから眠くなるにやー」

「猫姫!？」

「スウ……スウ……」

「もう寝てるし！」

「クウクウ……スヤスヤ」

「店主も寝てしまいましたね」

「全く……」

「たまには良いじゃないですか休日ですし」

「たく……仕方ないな……フフたまには良いか」

「そうですねおやすみなさいなのでオーナー♪」
「おやすみナザ」

第6話 「家でお花見」

第5話 「家でお花見」

「ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……………」

例のあれにより営業自粛中のふぶき屋

「あーフブキさん、暇にやあ〜」ゴロゴロ

「暇だね〜猫姫ちゃん」ゴロゴロ

「……………」カタカタカタ

「こんな日が続くとなーんもやる気が起きないにや〜」ゴロゴロ

「そうだね〜」ゴロゴロ

「……………」カタカタカタ イライラ

でっぴゅん……………」

「あーー!!おまえら気が散るんだよさつきから!!」

「えー擦り付けにやあ〜今のミスは黒さんのミスにやあ〜」

「なんだとー!!」

「そーだよー今のは黒ちゃんのだよー」

「フブキまでー!!」

「ただいま戻りましたです♪」

「あ!ナザお帰りにやあ〜」ピコピコ

「洗濯物ありがとーナザさん♪」ピコピコ

「あのーところでなぜオーナーはすみで丸くなってるのです?」

「……………」プイ」垂れ耳、涙目

「黒さん、私達に負けてすねちやったのにやあ」

「そ、そうなのですか……………」ヒラ

「ナザさんこれは?服のすそから落ちてたけど」

「?桜の花びらですな♪」

「桜にやあ?」

「うん♪庭にある桜がきれいに咲いてたよ♪」

「はあーそんなに桜が咲いてるならお花見したいにやあ……………」

「でも今は外出しちや行けないんだよ」

「むーわかってるにやー」
「あ！そうだ！じゃあピクニックしよう！」
「ですが店主、外出はダメですよ」
「わかってるって、だから庭の桜の下でご飯食べよう♪」
「それ良いにやあーフブキさん！私は賛成にやあ」
「確かにそれならば外出自粛に引掛かってませんね♪♪」
「それじゃあ！決まりにやあ！」
「わかりましたです♪♪料理は用意してきますです♪♪」
「ほら、黒ちゃん!!いつまでも拗ねてないで準備手伝って！」
「……………パイ…私はいい…………」
「黒さん私が悪かったにやあーだから機嫌直してにやあー」
「……………パイ」
「あの一オーナー？」
「……………何？」
「オーナーの好きな料理作りますが何が良いですか？」
「!?……………肉…………」少し元氣取り戻しながら
「かしこまりましたなのです♪♪」
「じゃあナザさん料理お願いね」
「はい♪かしこまりましたです♪♪」
「私もナザを手伝うにやあー」
「うん♪わかったたよーじゃあ黒ちゃんは私と物置から地面に座るためのブルーシートとってくるねー」
「……………」
「ほら！黒ちゃん行こ!!」グイッ
「あーわかったから引張るなー」

ふぶき屋物置

ギー

「うわーここあけるのも久しぶりだなー」
「すごい埃っぽいな」
「そうだねー長くいると体に悪いからすぐに探そー」

ガサガサ

ガサガサ

ガサガサ

「チツ使わない魔導書とかお札とかガラクタしかないんだが、ほんとにあんのかー」

「うーん、ここにしまったはずなんだよなー……………」

ガサガサ

ガサガサ

ガサガサ

ガサガサ

「お、あつたぞフブキ！」

「そーなんだー」

「?何みてんだ……………」

「えへへ良いもの見つけたんだー」

台所

ジュー

♪♪♪♪」

「ナザーー冷蔵庫の食材無くなってきたにやあー……………」

「そうだね、また山菜拾いに行かないとね」

「ハァーいつまで続くんだかにやあ〜……………」

「早く終わって欲しいねー」

「お肉なんて3日ぶりにやあーここんところみんなで釣ってきた川魚だったから嬉しいにやあー」

「でも姫ちゃん、すごい喜んでたじゃん」

「むーさすがに3日三食連続魚はさすがに飽きるのにやあー」

「そうだね〜私はわりとなれてるけど」さっさつ

「うーん良い香りにやあ♪♪」

「これをバスケットに詰めてつとこれで完成♪♪」

「黒ちゃんそっちのそっちのすみに杭刺してねー」

「はいはいわかってるよ」
「にしてもきれいだねー」
「たしかに毎年毎年きれいにさくもんだな」
「この木も私達と一緒に成長していつてるねー」
「……………そうだなー」

数分後

「フブキさーん黒さんー持ってきたにやあー」
「姫ちやーんこっちだよー」ブンブン
「わーー凄いにやあー♪♪」
「ほんとに何度見てもきれいに咲いてますねー」
「ほら！見とれてないで食べよー」
「了解にやあー♪♪」

「二」「いったきまーす」にやあ」なのです♪♪」
「うーん美味しいーこのサンドイッチ美味しいよー」
「久々のお肉にやあー♪♪」
「……………うまいな」

「ありがとうございますです♪♪」
「山菜も美味しいし、何より久しぶりにお肉食べたよー」
「最近魚ばかりでしたからね♪♪」
「またこの話かにやー」

「猫なのに魚にケチつけんのかよ」
「だーかーらー三食3日連続は飽きるのにやあー!!」

にやー！ガタガタこの。猫姫ー!!
「……………」

「……………どうしたのですか店主？そんなにポーツとして？」
「あ、ううん……………早くみんなにあいたいなーって」
「店主のお友だちの皆様ですか？」

「最近会えなくてちよつと寂しくてね」

「店主のお友だちの皆様は面白い方々ばかりですからね♪」

「うん、だからみんなでこうやってお花見したいなーって」

「良いですね♪やりましょう♪」

「その時はみんなにナザさんや猫姫ちゃんのこと紹介するんだー」

「私の紹介なんて良いですよ店主」

「そんなことないよ、だってナザと猫姫ちゃんは

私の大切な家族なんだもん♪」

「……………ありがとうございますです♪」

「だからみんなに紹介する時、恥ずかしくないでねナザさん♪」

「う、善処しますです……………」

「よーしみんなー物置で見つけたこの携帯型カラオケ機で歌うよー
！」

「わぁーフブキさん歌が聞けるのかにやあ!!」

「もちろんみんなにも歌ってもらうからね♪」

「げ！マジかよ」

「よーし勝負にやー!!」

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

(皆様ですか……………すい様やかなた様、それに……………)

ビビちゃんやトワ様にまた会えるのですね♪♪(ニッコリ)

こうして四人のお花見は夕暮れまで続くのだった……………

第7話 「山川散策」

第7話 「山川散策」

「ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……………」

ふふき屋近くの山奥の川

「あ、引いてるのです!!」

「また、ナザの釣竿に当たりがきたのかにや……………」

「それっ!」グイッ

ピチピチピチ……………」

「いい感じ大ききの山鮎だね、これはキープっと」バケツにポチャッ

「ハアア……………」なんでナザばかり釣れるのかにや〜」ヒュッ

「姫ちゃんは、そうやってすぐに釣竿引いちやうから釣れないんだよ。もうちよつとじつとしないと。」

「それは、釣れてないのにこうやって、みよんみよん、と揺れるから紛らわしいのにや!!」

「それは、釣糸についてる重りとか水の流れてそうなるんだよ。魚が食い付くともつとぐつてくるから、全然違うんだよ。」

「そんなこといわれてもにや〜、一回も釣れて無いんだから、わかんないにや、そんな感覚」ポイツ

「根気強く待つことだよ、姫ちゃん♪そうすれば必ずくるよ」
「……………」ナザがそういうなら、頑張ってみるにや〜」

グイッ!!

「にや!!」

グイグイ……………」

「引いてるにや!!当たりがきたにや」グイッ

グイグイ……………」バチャバチャ……………」

「なんて引きにや、これは大物にや」

バシャバシャ……………」グイッ

「にや〜!!絶対につり上げたいけど……………」ズルズル……………」

「このままじゃ、こつちが引きずりこまれちやうにや」

バシャバシャバシャ……………」ズルズル……………」

ま、まずいにや……………

ギユ!!

「にや!？」

「姫ちゃん!!大丈夫?」

「ナ、ナザ!?押さえてくれるのは嬉しいけど、このままじゃ、ナザも落ちちゃうにや!!」

「大丈夫…木にしっぽを巻き付けてるから。姫ちゃんもしっぽを私の体に巻き付けて」

「わ、わかつたにやあ」クルクル

「す、凄い引きだね」

「そうなのにやよ、こはこの川の主に違いないにや!!」

バシヤバシヤバシヤ!!…………グイグイ…………

「ぐぐぐ!!…………ナザ、頑張って押さえてくれにや!!」グググググ…………

「大丈夫…………絶対放さないから…………!!」

バシヤバシヤバシヤ!!…………グイグイグイグイ…………

「火事場の馬鹿力にや……!!」グイツ!!

バシヤツ!!

「キヤア!」バタ

「にやあ!!」バタ

ピチピチピチ…………

「や、やったにや……………つれたにや……!!」

「やったね姫ちゃん♪♪」

「ナザが押さえていてくれたおかげにや♪♪」

「私はちよつと手伝っただけだよ、姫ちゃんが頑張って釣ったからだよ。」

「そんなこと無いにや、だから2人の成果にや!!」

「そうなの?」

「そうにや!!そういうことにしようにや!!」

「じゃあ、そういうことにしようか」

「そうにや♪それにしても立派な魚にや」

「劍鮭っていう魚だね。」

「おー私の好きな魚にや♪ナーザー早く食べようにや〜」

「集合場所に帰ったらみんな食べよう。店主達もそろそろ戻ってくる頃だろうし」

「わかったにや、そうと決まれば急いで戻ろうにや!!」

山腹……

「あ！あつたあつた、黒ちやーんあつたよー」

「ゼエゼエ……フブキちよつと待って……」

「もー黒ちゃん、もうつかれちやつたの？さつき休憩したばかりじゃん。」

「フブキだつてさつきまで疲れきつてたじゃないかよ、なんでそんなに元気なんだよ?」

「あれぐらい休憩すれば誰だつて元気になるよー、黒ちゃんは普段からゲームばかりで動かなすぎなんだよ。」

「フブキだつて私のこと言えないだろ、ここんところ一日中ソシヤゲばかりやってんじやないか。」

「良いじゃん、こういうときなんだから一日中やってたつて、それにいつも動いてたんだもん」

「あーわかったから!!動かない私が悪かったから!」
「わかったなら、山菜集めよう♪♪サボっちゃだめだよ」

ガサゴソ……ガサゴソ……

「フブキ、これは?」

「それはただの草だよ。」

「な!?違うのかこれ」

「うん、こういう柔らかめな葉っぱとかの草だよ」

「んーわかった」

ガサゴソ……ガサゴソ……

「黒ちゃん、集まった〜」

「これぐらいでどうだ?」

「うん、これくらいあれば十分だと思うよ。じゃあ、この山菜達をしようかごにいられてつと。」

「で、下りはどっちが背負うこれ？」

「え！黒ちゃんが背負ってくれるんじゃないの？」

「はあ!!なんで勝手に決めてんだよ。」

「えーだって私が山菜探して、黒ちゃんがしよい籠持ってくれるんじゃないの?」

「そんなこと、私は一言も言ったことないぞ!!」

「えー良いじゃん、ここまで持つてくれたんだからさ。」

「絶、対、に、やだ!!」

「じゃあ、ここは公平にじゃんけんで決めよう。これなら、恨みつこなしでしょ。」

「……………わかったよ。」

****数分後****

「ほら、黒ちゃん早く〜おいてつちやうよ〜」

「以外と重いんだよこれ!!急かすんじゃないよ!!」

「じゃんけんで負けたんだから文句言わないの〜」

「くっそ……………帰りの荷物持ちは絶対勝つてやる……………」

「ふう〜やつと降りてくれた〜」

「ゼエ…………ゼエ…………やつと川辺まで帰ってこれた。」

「頑張つて黒ちゃん、ナザさんや猫姫ちゃん達との集合場所まであとちよつとだから。」グイッ

「ちよつとフブキ、引つ張んなよ。ちよつとくらい休憩しようよ。」

「ハアハア……………」

「あとちよつとだから♪」クンクン

「ふあ〜黒ちゃん、いい匂いするよ♪」

クンクン「あ、ほんとだ……………焼いた魚の匂いだ」

キュ〜〜〜

「?!?!?!」

「あれ〜黒ちゃん、お腹減っちゃったの〜」ジト〜

「う、うるさい!! いいからとつとと行くぞ!!／／／」
「わかってるよー♪♪」

川辺の四人の集合場所

「ナザー焚き火炎安定してきたにや〜」

「はい、ちよつと待っててね、山鮎を串に刺してつと」

「もう、その時点で美味しそうにや〜」

「これを、火の近くに刺してとこれで焼き上がるのを待つだけだね。」

「美味しそうにや〜そういうえば、劍鮭はどこにや?」

「劍鮭はいまから切り身に捌こうとしていたところだよ」

「それは楽しみにや〜……つて、あ!! フブキさんにや♪♪おーい♪♪」

「あ! 猫姫ちゃん!、ナザーさん!、ただいまー♪」

「お帰りなさいです、店主♪あれオーナーは?」

「黒ちゃんなら、もうすぐくるよ。」

「あ、いたにや」

「ゼエ……ゼエ……」

「オーナー大丈夫ですか?」

「つかれた〜……」

「黒ちゃん、お疲れさま」

「お疲れ様です♪♪オーナー」

「お疲れ様にや〜」

「お腹すいた〜」

「そうですね♪お昼にしましょう♪♪」

「フブキさん、聞いてにや〜♪♪私とナザでおっきい魚を釣ったの
にや〜」

「そうなの♪聞かせて聞かせて♪♪」

「それは食べながら話すにや〜♪♪♪♪」

「「「いただきますーす」」にや」です」

「んー♪♪♪焼きたて美味しー♪♪♪」

「うまいな」

「美味しいにや♪美味しいにや♪♪」

「やっぱり、直火はグリルとは全然ちがいますねー」

「しかも焼きたての剣鮭で飯ごうの炊きたてご飯なんて……もう幸せだよ♪♪」

「お焦げの部分は最高にや〜」

「なあ……前から気になってたことがあるんだかい？」

「なーにー黒ちゃん？」

「商店街に買い物に行けなくなったのになんで私達の家って、ご飯とかパンはあるんだ？」

「私も気になってましたです、どこから貰って来たのですか？」

「お米とパンはねーおにぎり屋さんとパン屋さんをやってるお友達がいてね、余ってるからって分けて貰ってるの」

あーあいつらからか、そういうことならつじつまが合うな

「そうだったのかにや」もぐもぐ

「優しい方々ですね♪♪」

「うん♪だからこの騒ぎが終わったら、沢山お礼をしないとね♪」

「そうですね♪♪」

「「ごちそうでしたー」にや」です」

「美味しかったにや〜」

「うん、とつても美味しかったね」

「そろそろ帰りますか、店主？」

「んー……せっかく来たんだから、もうちよつと遊んでから帰ろう♪♪」

「賛成にやー♪♪」

「遊ぶつったって、こんな山んなかでどう遊ぶんだよ？」

「んー……」

「んー……」

「そうだ」ポン

「？」

「？」

「？」

「今日、暑いから川遊びなんてどう？」

「賛成にやフブキさん」

「いいですね」

「川遊びっていくらなんでもようちす………」

バシヤツ！

「にや!!」

「にやふふふふ……どうにや、これで黒さんの石頭もちよつとは柔らかくなつたにや♪♪」

「ね〜こ〜ひ〜め〜!!!」

「悔しかったらこつちにこいにやー♪♪」

「こんのー!!」バシヤバシヤツ

「そんな攻撃当たらないにや〜♪♪♪♪」

「!!!」

「黒ちゃん、あんなこと言つてたのに遊ぶ気満々じゃん」

「そうですね♪」

「私達も行くこう♪♪」

「はいなのです♪♪」

バシヤツバシヤツ!!

にや!!ナザ、しっぽはズるいにや〜

黒ちゃんえい!

にや!!フブキ!!!

バシヤツバシヤツ………

四人の声は夕方まで続くのでした………

第8話 「猫又と雪のづゝ令嬢」

ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……………

ジリジリとした太陽の暑さが降り注ぐ商店街の大通り…

「あじい〜にや〜……………」

ふぶき屋の店員で猫又の少女、猫姫は虚ろな目で大通りを進んでいった

「いくら何でもこんな暑い日に書類忘れたから事務所に届けろなんてフブキさんひどくないかにや〜」

黒さんは当たり前前になげど外なんて出るはずないしくナザは朝から出掛けてしまったから結局私が行く羽目ににやっってしまったにや〜……………

とわいえ届けた時フブキさんから今日は多めにお小遣いもらったしお昼食べて、当番だった買い出しもやっちやおうにや〜

そう思いながら私は商店街の大通りを進んだ

今日のお昼ご飯何食べようかにや〜こんな暑いんだから冷たくてあと甘いのも食べたいにや〜♪♪

美味しいお店がないか辺りを見回していると…

にや？

私は商店街の一角……………丁度影になって少し薄暗くなっている所のベンチに座る女性に目が止まった

腰まである水色の髪と白い肌の綺麗な女性であつたが何か様子が変だと思つて近付いてみた時私は目を見張つた

こんな暑い日だと言うのにその女性の上着はどう見ても冬物の服であつた。そしてなぜか両手には髪と同じ色の壺を抱いていた

私が顔を覗くと白い顔はほんのりと赤く呼吸も少し荒かつた

「もしもーしお姉さん、大丈夫かにや〜」

優しくお姉さんの肩を揺らすもお姉さんの反応は「はい〜……………」とあいまいなものであつた

こりや不味いにや！

呼吸の荒さとかこの顔の赤みがかかり、それにこんな状態なのに汗も

全然出て無いつてことはどう考えても脱水状態にや早くどこか涼しい所に運ばにやいとたいへんなことになるにや

周りを見渡しながら近場で涼しくお姉さんをいきなり運び込んでもへいきなお店はどこか考えた……………

……………あそこなら空いてるにや！

そう思った私は迷わずお姉さんを背負った

壺は置いて行こうとしたものの、壺が浮き出して中からちっちゃいシロクマのような生き物が顔を出した

「中身が入っていたのかにや」

壺の生き物はじつとこちらを見ていた

私達の言葉は喋れにやいのかにや？だけどこつちの言葉は分かっているようだったにやし

「このお姉さんを涼しい所に連れていくにや、自分で付いてこれるにやら付いきてにや」

壺の生き物は頷いて私に近付いて私の真横に止まった

私はお姉さんの負担にならないよう日陰を移動しつつかつスピーディーに向かった

「あの助けていただきありがとうございます」

喫茶店の置くの一番涼しいテーブル席、運び込んだお姉さんはお冷や入ったグラスを両手に持ってお礼を行った

「元気がすぐ出てくれて良かったにや」

私は笑顔で答えた

でもほんとに良かったにやこの喫茶店が開いていてくれて

ここは洋風喫茶店「チェシヤー」この町に住んでる猫族なら誰でもしってるお店にや、店員はマスター一人でこじんまりとしたお店だけどお店も綺麗だしマスターの作るパスタは絶品なのにな

時間的にも開店したばかりだったからお客さんも居なかつたおかげで私が駆け込んだ時、マスターの猫族のお姉さんは事情を説明したら直ぐにこの席に案内してくれて良かったにや

「にしてもお姉さんはどうしてあんな所に居たのかにや？」

「この町最近引っ越して来たばかりでほとんどお店の場所など、どこへ行ったら良いのか分からなくて、そしたらこの暑さにやられてしまっ」

お姉さんはグラスのお冷やを飲みながら答えた

「確かにこの町は入り組んでるから初めては迷うから仕方ないにや〜」

「そうなのですか、私ずっと一面真っ白な雪に覆われた所から来たのでこの暑さや複雑な町並みになれなくて…」

「お姉さんは雪国出身なのかにや、だから夏なのにそんなに厚着なのかにや」

「はい、私の居た所は年中雪が積もっている所だったのでこの暑さが予想外過ぎました」

そんなん話をしているとお姉さんのお腹から「キュウ…」と言う音がなった

「!？」

お姉さんは顔を真っ赤にしてお腹を押さえた

「お姉さんお腹空いてるのかにや？」

「えっ…その…はい……………」

お姉さんは顔を真っ赤にしながら頷いた

「私もお腹ペコペコなのにや〜マスター冷やしパスタお願いにや〜♪」

カウンターの奥にいるマスターに声をかけるマスターは笑顔でこたえた

「お姉さんも何か頼むといいなや〜♪♪」

「えっと…私も同じ物にします」

「分かったにや、マスターごめんによ〜さっきの冷やしパスタもうひとつ追加でお願いするにや〜」

私の注文を聞くとマスターは「かしこまりましたにやっ」と頷き厨房へと姿を消した

「料理が来るまでの間私が商店街とかこの町のこと教えてあげるにや〜」

「良いんですか？」

「大丈夫にや〜町の事とか教えないとまた倒れられてしまおうと困るのにや〜」

私がお姉さんにこの町のことを教えようとした時、大事な事をやってないことに気づいた

「あつしまったにや、そう言えばまだ自己紹介をしてなかったにや」

私の言葉にお姉さんもハツとなっていた

「そうでした、すみません助けていただいたのに名前を名乗らないなんて」

「そこは別に良いのにや〜私は猫姫、妖又 猫姫って言うのにや〜♪
♪お姉さんはなんていうのにや？」

「私は雪花 ラミイともうします、そしてこっちの壺に入ってるのは私のお供の精霊でだいふくと言います

改めて妖又さん、私とだいふくを助けていただきありがとうございます
ます」

「そんなにかしこまらなくていいにや〜それに呼び方は猫姫で良いし
さんずけもしなくていいにや〜」

「えっ…：そうなのですか…：えっ…とでしたら…：猫姫ちゃんありがとうございます
ございます」

「それでいいにや〜この辺のこと教えてあげるにや〜」

そうして私はラミイさんとお互いのことも語りながら周辺のお店の事を話した

マスターが料理を持ってきてくれた後は二人で冷やしパスタに舌鼓を打ちつつ食べてしばらく涼んだ後、お会計をして喫茶店を出た

「美味しかったにや〜♪♪」

「そうですね、それにお昼ご飯までおごっていただきありがとうございます
います」

「別に良いのにやそんなことぐらい、それでラミイさんはこれからどうするのかにや？」

「えっと私は自宅から戻る前に夕食の買い物しようかと」

「同じにや良かったら一緒に行っても良いかにや？」

「ぜんぜん大丈夫ですよ、むしろどんな物を買ったら良いのか色々教えてください」

「わかったにや、商店街のおじさんやおばちゃんの攻略法を教えてくださいにや」

「是非教えてください」

「よし行くにや」

そう言つて二人は商店街の生鮮商品エリアへと足を運んで行つた

「ふう〜いっぱい買ったにや」

両手いっぱいの商品を持ちながら私は言つた今日は値切りもかなり上手くいった気がする

「猫姫ちゃんは沢山買うんですね、その食材を一人で食べてしまうのですか？」

「そんなわけがないにやこれは私達四人分のご飯にや」

「家族がいるんですか？」

「家族と言うか私はふぶき屋つて言うお茶屋さんで住み込みで働いていて今日は買い出しの当番だつたのにやそれに私にとってはみんな家族にや」

「そうだつたのですか…」

ラミイさんは少しうつむき

「外の世界を知りたいって思つて家を飛び出してだけ何かも分からなくて倒れてしまい…ほんとに世間知らずですね私つて…」

「そんな事ないにや誰だつて最初は知らないことだらけにや、いろんな経験してちよつとずつできていくものにや」

「猫姫ちゃん…そうですな私頑張つていきます」

その時私は初めてラミイさんの嬉しそうな笑顔を見た

「その意気込みにや〜♪」

その後は二人で商店街の大通りを歩きつとお互いの話やふぶき屋の事を話した

商店街の出入口

「まだまだ話したいですけど私のお家があつちなのでここでお別れで

すね」

「そうにやねそろそろ帰らないといけない時間にや」

「今日は何から何まで本当にありがとうございます」

「ぜんぜん平気にあこれからは倒れないでにやね」

「はい、気をつけますあと今度ふぶき屋にお邪魔させてもらっても良いでしょうか？」

「ぜんぜんいいにやむしろ大歓迎にあ♪♪いつでも来てくれて構わないにや」

「では今度必ずお邪魔させていただきます、あとお礼としてこれを受け取って貰えませんか」

そう言つてラミイさんは上着のポケットから何かを取り出すと私の手の上に置いた

「これはなんにあ？」

私が受け取つた物を見るとそれは白色の花と青色の花が重なりあつた綺麗な髪飾りであつた

「良いのかにあやこんなきれいにや物貰つて」

「良いんですこんなお礼しかできませんのでどうぞ受け取ってください」

「大切にするにあ」

「はい」

二人はお互いに楽しそうに笑いあうとまたあおうと言いいいそれぞれの帰路へと進んだ

数日後

ふぶき屋

「猫姫ちゃんその髪飾りなあに？」

いつも通り開店の仕度をしているとフブキさんが話しかけてきた

「この髪飾りかにあ？これはこの前仲良くなった人から貰つたのにあ♪」

「すごい綺麗な髪飾りだねまるで綺麗な雪中に咲いているお花みたいですよいい似合つてよ」

「嬉しいにや」

フブキさんに髪飾りの事誉められながら私は開店の仕度をに
戻る
ラミイさんにまた会える事を楽しみにしながら今日も楽しく営業
を始める

その日は何だか自然と笑みが絶えない日であった

第9話 「白獅と紫龍」

ここはこの世界とは違う異界のお茶屋……………

頭上がかたかた揺れている電車の高架下の飲食街

その一角のうどん屋さん

「美味しいのですこのうどん」

ふぶき屋の店員の一人、ナザは尻尾を揺らしながらかけうどんをすすっていた

「まさかあなたがこの街に引越してきた事も衝撃でしたがもうこんな行きつけのお店を見つけていたことも衝撃なのです」

私は自身の隣へと声をかける

隣に座っている少女は私と同じくうどんをすすっていた

「えー私だって怪牙かいががこの町に住んでたなんてびっくりだよ」

「名字で呼ばないでください獅白さん」

ホワイトライオンの少女、獅白ボタンはむくむくしているナザを面白そうに見ていた

獅白さんとの出会いは数時間前にさかのぼります

数時間前

この日は町の郊外を流れる川の土手を歩いていたのです

いや正確に言えば

「(ハハ)…(ヒヒ)…」

迷ってしまつたのです

今日はお店も休業日だったのでどこか出かけようと思つてふらふらと歩いていたらここに…

この時のナザは普段の和装メイド服ではなく黒色のTシャツの上に白色のジャケットとジーパンというの服装であつた

「この店主から頂いたスマホさつきから真っ暗になって動きませんし…しかもこの辺り看板もないですしかも最悪なのです」

ポケットから取り出した真っ暗のスマホ画面をポチポチ触りながらがつくりとうなだれていた

「はあ〜〜……」

「これからどうしよう

そんなことを思いながら土手に座りこんでいると

「あれ？怪牙じゃん、どうしたのそんなところに座りこんで」

背後からかけられた声に私は背筋は氷ついた、なぜなら私はほとんど名字を名乗った事なんてないからである

私は顔後ろへ向ける

「やっぱり怪牙じゃん」

そこには黒いジャージのような服に白よりの灰色の髪をした少女が私の顔を覗いていた

「獅白様？」

私は半信半疑に言った

「お、私のこと覚えていてくれたんだ〜」

「えっほんとに獅白様のですか?！」

「もちろん獅白ボタンなんて私以外いるわけないじゃん」

「お久しぶりなのです」

私は立ち上がり獅白様に近付いた

「なーにー?すごい不思議そうな顔してるけど私の顔に何か付いてるの?」

「あついえ、というか不思議そうな顔にもなりますよ!?!どうしてあなたがここにいますか?」

「え〜私ね〜ここに引越して来たんだよ〜」

「引越してきたのですか!?!」

えっ引越してきた!この人確かギヤングタウンに住んでたはず

…それで引越してきた!?

「なんかすごい目回してるけどだいじよぶか〜」

「あついえ、いきなりだったもので思考が追いつかなくなっただけ」
「まあ私も怪牙がここにいるのびっくりだったけど、まあ積もる話しも沢山あるだろうし、どっかで食べて話そ〜私いい店してんだ〜」

そうして私は獅白様に連れられて土手を後にしてこうして今に至るのです

こうして高架下の飲食街に着いた私はお互いの近況について話し合った

「もう怪牙がどっか行っちゃってあのあと私大変だったんだから」
「あのときはあなたもグループを解散させるって言ったからじゃないですか」

「えーそうだったっけ？」

「そうですよ、まったく相変わらずマイペースなんですから」

獅白様との出会いは数年前、ここからずっと西にある街、ギャングタウンでした。

今でこそ大分マシになってきている治安も当時は最悪なレベルで街は何十ものグループによって勝手に支配されていて、それを取り締まる行政組織もまったく機能してない無法地帯でした。

私が出た獅白様のグループは他の奴らと違い、縄張り内で何かしらの悪さをするともなく、ただぐうたらとしていて、縄張りに入ってきた他のグループの奴らを追い出す。

そんなことしかしていなかった。

だけどそんなことをしている内に、気づいたら縄張りの商店街の人達から慕われていき、気づいたら敵対していたグループもなくなっていく。縄張りが広がっていく。

気づいたら増えているグループのメンバーを横目に、いつも獅白様はつまらなそうな顔をしていた。

そして、気づいたらグループもほとんど無くなり、行政もやつと回復した頃、獅白様は突然グループの解散を宣言した。突然の解散発言に当初はいろいろあったけど、結局は解散し、私もギャングタウンを出て、放浪の旅へと戻ったら。

「それにしても、まさか怪牙が噂で聞くフブキ先輩のやってる店で働いてるなんてね」

「私だって、獅白様が店主と同じところで働くななんてびっくりなのですよ」

「えーそうっ？」

「そうですよ、どうしてなのでしょう？」

「それいったらなんで怪牙もフブキ先輩のお店で働いてるのよ？」

「……………」ウツムク

「はぁー怪牙ってほんと自分のこと語りたがらないよね……………」

「……………」

「……………」私がグループ解散させた理由しってる？」

「……………」

「私ね…グループ持って、他の所と抗争して、それで気づいたらなんか自警団みたいな感じになって、でも私、つまらなかったのよね…みんなにリーダーって慕われても何か違ったのよね…なんか私じゃ無くても良かったというかね」

「……………」

「でもね、ここに来て私楽しいこと…夢を見つけれられたのよね」

「そうだったのですか……………」

「さっ！しみりとした話しはここまで、ほら次の店行くよー」

「えっ！まだいくのですか!？」

「あたりまえじゃんまだ一件目だもんほら行くよー」

獅白は会計を払うとナザの手をつかみ次の店へと連れていった

夕焼けの商店街

「いやーおいしかった〜」

「まさか三件も行くなんてびっくりなのですよ」

「でも美味しかったでしょ？」

「確かに、美味しかったです」

「もう夕方だけど今日家に泊まっていく？」

「獅白様の家ですか？」

「うん、怪牙の大好きな大葉もあるよ〜♪♪」

「あれですか…確かに匂いも良いですし、味も良いですけどあれの味を覚えてしまうと、他で替えが聞かなくなってしまうし……………」

「ぎーねん」

「それにここまで来たならもう道にも迷いません大丈夫ですよ♪♪」
「なら良かったく怪牙すぐ迷っちゃうから」

「私はあの頃とはちがうのですよ!!」

私が帰路につこうとした時

「あっそうだ!」

「はい?」

「ししろん」

「えっ?」

「獅白じゃなくて、ししろんって呼んでこれからは」

「いきなりどうしたのですか?」

「だって私たちグループの仲間じゃなくて友達でしょ?」

「友達……」

「だからみんなにもそう呼ばれてるから、ししろんって呼んで」

「…し…ししろん…」

「うん♪♪ちゃんと呼べるじゃん、じゃあ私はなんて呼べばいい?」

「ふえっ!えっと……ナザ…」

「じゃあナザ改めてよろしくね」

「はいなのです♪♪ししろん♪♪」

「今度お店行っても良いよね?」

「もちろんなのですよ♪♪」

「楽しみだなーナザのきれいな着物姿♪♪」

「ふえ!!……／／」

「何赤くなってるのよ」

「この……私だって、ししろんのアイドル衣装楽しみに待ってるのですよ♪♪」

「はう!!返してくるとは思わなかったんだけど……」

「成長したんですよ♪♪」

商店街の夕焼けが赤々と照すなか、それぞれの帰路に着く二人の少女の影は一度は離れながらも、また一つになるかの如く重なりあつて

いた。